

# 第38回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。  
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

## ■中学校3年生の部 最優秀賞

### 努力の意味

弟子屈中学校 桐木 頼子さん



私は天才に憧れました。私はこれといった才能もなく、運動も中の下、音楽にも関心があ

まりないです。でも勉強だけは努力と気合で楽しく頑張ってきました。努力が私の原動力のひとつでした。受験生になった今、私は色々な人の学力を見て、努力だけではこれから勝ち上がれないと思ってきました。努力の量なら誰にも負けない自信があった私にとって厳しい現実の壁でした。少し下を向いていた私にある本が目になりました。『武士道シックスティーン』。真っ赤な表紙でインパクトが強烈だったことを覚えています。帯に「今までになかった青春エンタメ剣道小説」と書かれていて、部活を引退した私にぴったりだと思って購入しました。そしてこの本の主人公、香織に努力の意味を改めて教えられました。

香織は全中準優勝、道場の一番弟子で剣道のエリートでした。でも香織は才能だけではなく、努力と根性でも成長していました。香織が小学生のとき、友達との遊びも断り剣道の練習をしていました。『らしい練習でも』らしいと言わず、努力で強い剣を手に入れました。私も勉強や部活が厳しい時、父に「自分は木になり

たい」と言ったことがあります。木はつらいこともなく、道に立って平和に暮らせるから」と言った私に父が「それは違う」と言いました。「確かに木はつらいこともなく、立っている。でも楽しいこと、嬉しいことは感じられない。つらいことも努力をして乗り越えたら楽しさが二倍、三倍になって待っているよ。」と言ってくれました。その時を思い出した瞬間、涙が出そうなくらい深く感動しました。私は今、香織の途中の段階にいるんだと思いました。香織と比べたら私はまだまだです。努力の量も一枚以上上手でつらいことだけでなく、思い出も削っています。でも自分も努力をしたからこそ感じられる、努力なしでは得られない気持ちを学びました。

私が今、一番苦労している課題、「どうすれば努力の上にいけるのか。」この課題に香織はこんな言葉をかけてくれました。「簡単だ。今までより練習すればいいことだ。」これは香織が後輩のどうすれば強い敵に勝てるのかという質問に答えた言葉です。「今までより・・・」ということとは前の自分を越える、ということ。「自分」との闘いなのだと思います。私はできない自分が悔しくて、よく親にあたりしてしまっただけがあります。周りの環境が悪くて妹にあたってたことでもあります。けれどそれらは自分の責任でした。自分を知らないまま難題にぶつかったがために起こった事実だったのです。そのことに気がついた私は恥ずかしくなりました。そして思いました。自

分を知り、自分に合った精一杯の努力をしよう。それが「自分」との闘いで必要な武器なのです。そんなことを考えてまた火がつかました。そして今までの自分を見直したとき、私の周りにいた家族の存在が私の支えになっていたことにも気がつきました。今まであたってきた私を受け止めて、見守ってくれた家族への感謝の気持ちもこみ上げてきました。自分を知ることでもわかることがたくさんあることを香織が教えてくれました。

香織が私に一番伝えたかったことはなんなのか。それは努力の意味だと思えます。努力では限界があるかもしれませんが、そこで諦めて終わってしまうのかもしれません。しかし香織は違いました。本の中で「努力は必ず実る」という事を証明してくれました。剣道という私と違った競技でも努力の意味を教えてくださいました。努力はつらいし、厳しいです。天才には感じることもない苦痛もあります。その苦痛を味わって人間は成長していくのです。ロンドンオリンピックでも、一瞬のために四年もの歳月を注いだ選手たちがいました。悔しさをバネに前へ、前へ進む人が私には天才よりも遙かにかっこよく見えました。私も夢を叶えるために、努力ではい上がっていきたくです。『努力はかっこいい。』

書名『武士道シックスティーン』

誉田 哲也 著

(寸評) 懸命に努力することがかっこ悪いと錯覚されることもありますが、桐木さんはき

代わりに引き受けて生きていくのだと思っ

死はマイナスなことではなく、むしろ人生を完走したことへの祝福に変わるだろう。

そしてその祝福が死から生まれる幸せになり、残される家族だけでなく、亡くなる本人の笑顔の最期に繋がる。

看取るために必要なものは、時間でも急速に発達していく医療技術でもない。家族だ。故人に対する家族の想い、最期を見守る勇気と覚悟である。

これによって本当に救われるのは誰なのか。きっと亡くなっていく人ではなく、残される家族ではないか。

目の前で後悔を口にしながら旅立つよりも笑顔のまま旅立つほうが何倍もすっきりとする。

死によって命の素晴らしさを伝える人たちがいる。

現在は、死のショックを避けるために子どもには死に目には会わせないという人も多いだろう。

実際に私も、朝起きたら入院していたはずのおばあちゃんが居間で寝ており、親戚のおじさんやおばさんが周りを囲んでいた。わけがわからない私におばあさんは、「良かったね、これでおばあちゃんはずっと一緒にいれるんだよ。」と言った。

この言葉がなければ私は、おばあちゃんの死を乗り越えることはできなかつただろう。

入院ばかりで一緒に遊んだこともなかったが、これからは私を見守ってくれ

## ■高等学校の部 最優秀賞

### 大切な人の死を笑顔で迎えるには...

弟子屈高校2年 金澤 春奈さん



「死」についてのようなイメージがあるだろうか。マザー・テレサ氏は「たとえ人生の九十九パーセントが不幸であったとしても、最後のパーセントが幸せならば、その人の人生は幸せなものに変わる。」という言葉を残した。

死には「つらい」や「苦しい」など、否定的なイメージばかりがつきまとう。実際にそう思っている人が多く、私も身もそのうちの一人だ。

理想では「安らかに眠りたい」や「家族や仲間に見取られたい」などがある一方で、「最近では病院や老人ホームといった施設スタッフに見取られる死や孤独死が増えているのが現実だ。」

そんな理想と現実がかけ離れている現在の世の中で「理想の死」や「幸せな死」を提供するのが「なごみの里」であり、「看取り師」の柴田久美子さんだ。

なごみの里は島根県の沖合に浮かぶ隠岐諸島の最南端知夫里島にあり、入居者は三人、様々な資格を持った正規職員と村のボランティアを加え、スタッフは十人を超える。柴田さんはなごみの里は「世界で一番手厚く、行き届いた介護だ。」と言った。

なごみの里には、「幸せな死」やあえて死を見せる「命の授業」がある。

そして、残される家族は「見守る勇気」看取る覚悟」や看取ることによって本当に救われるのは誰なのかを気づくだろう。

芝田さんも看取り師という立場からサポートをしている。

幸せな死は、残された家族に幸せを残すと柴田さんは言う。

同時に「だれにでも看取り師になれる。大切なのは気持ちだ。」と言っている。

幸せな死は、自分の満足いくまでやりたいことをやり、大切な人たちに囲まれて死ぬことだと思っていた。

死ぬのは自分で、他の人には死ぬ時の痛みや気持ちはわからないし、孤独なものでしかない。

大切な人を失うこと自体つらいことなのにその死から本当に幸せは生まれてくるのだろうか。

そのために私たちは何ができるのだろうか。

死は、代々受け継いできた命のエネルギーを次世代に受け渡していく、命のリースだと柴田さんは言う。

こう考えると、大切な人が一生懸命生き、受け継いできたバトンを次は自分が

ているのだと思っ

この思いこそ、大切な人を看取るための第一歩になるだろう。

書名『家族を看取る』

心がそばにあればいい』 國森 康弘 著

(寸評) 「人間の命」という非常に重いテーマを扱った作品ですが、読後感が前向き、かつ、建設的な形で終わっているのが素晴らしいです。人間が必ず迎えないなら、最期のときを高校生らしい感性で捉え、祖母の死という実体験を交えながら正面から向きあつた姿勢も大いに立派です。

今後に向けて、直接的文章表現だけではなく、さまざまな表現方法を使うと、より効果的な表現ができるようになると思います。



※生徒の学年は、コンクールが行われた平成24年度当時のものです。